

南埼玉におけるバス交通と市街地化

西井光恵

南埼玉は、東京の膨張により人口の増え続けている地域であるが、交通機関の発達は南北方向のものが主流となっており、東西方向のものがあまりみられない。本論文では、東西交通の主要な役割を果たしているバス交通が都市部の市街地化とどのような関係があるのか、路線の開設時期と町丁大字別の人口推移をみていくことにより明らかにすることを目的としている。

南埼玉は台地及び低地が多いので、可住地面積が大きく、かつ東京に隣接しているという地理的条件から人口が増え続けており、急激な人口集中や市街地化の拡大があった。人口推移をみると、昭和35年～平成5年の人口の伸びが2.5倍をこえる市がほとんどである。この中で昭和30年頃からの町丁大字別の人口データの得られた浦和市、大宮市、上尾市を事例として分析した。

その結果、路線の開設時期と人口増加には、以前はいくらか相関がみられたが、昭和50年頃からはほとんど相関がみられないことが判明した。昭和50年頃は、埼玉県において乗合バスの輸送人員が減少し始めた時期であり、この頃からバス事業者が人口増加の激しいところにあまり新たに路線を開設していないといえる。そして、都市部において人口増加の激しいところでは、運行回数を増やす等の対応をしてきたと考えられる。

また、南埼玉の都市部を全体的にみると、鉄道駅の近辺では人口が減り、やや離れた地域で人口が増加してきた。すなわち、鉄道駅からやや離れ

たバスを利用しやすい地域で人口増加が目立ってきたといえる。それにもかかわらず、バス路線が増えなかったのは、昭和45年から平成2年までの20年間で埼玉県における乗合バスの輸送量が8割弱になっているのに対し、自家用車の輸送量は8倍以上になっていることから、モータリゼーションの進展の影響が大きいと考えられる。

しかし、都市部のバスは、通勤・通学者・高齢者等には都市生活上欠かせない公共輸送機関として依然として重要な役割を果たしており、都市化社会、高齢化社会を迎えるなかで、市民の足として将来的にもますます重要なものになると思われる。今後、鉄道駅付近は便利であるが地価も高いために、やや離れた地区において人口が増加していくと予想される。この地区の良好な発展のためにも、都市バスの役割は重要であるといえる。したがって、道路改良、交通規制措置、サービス向上等の都市バス活性化対策とともに、バス停・バス路線の配置を適切に行っていく必要があると思われる。

ここでは、データが限られていたため、バス路線の開設時期と町丁大字別の人口の推移の関係をみるに留まったが、路線や区間ごとの運行回数や輸送人員の推移、及び地区ごとの土地利用の変化をみていくことができれば、バス交通と地域開発の関係をより詳しく分析できると考える。そして、今後このような分析がバス路線の適切な開設に役立つことを期待する。